

原爆文学研究

—体験を表現することに着目して*

フィリズ・ユルマズ (学籍番号 200921753)

研究指導教員：黒古一夫

副研究指導教員：武者小路澄子

1. はじめに

「原爆文学」は広島に原爆が投下された時点から始まる。初期の原爆文学作品は、広島で被爆した小説家の原民喜や大田洋子、詩人の峠三吉や栗原貞子、及び歌人の正田篠枝らによって書かれた。彼らの作品は直接的な被爆体験に基づいて書かれており、作品の中で「原爆の悲惨さ」や「平和の尊さ」が強く訴えられている。以後、原爆文学という名称は、「ヒロシマ・ナガサキ」と呼ばれるようになる未曾有の悲惨な出来事や原爆(核)について書かれた文学の総称として用いられるようになった。

私がそのような原爆の現実について初めて知ったのは、小学校の時にトルコ人の詩人であるナーム・ヒキメット(1901～63年)によって書かれた『Kız Çocuğu(死んだ少女)』(1956年)を読んだからである。『Kız Çocuğu』は、広島で被爆死した女の子の気持ちになって書かれたものであるが、それまでも反戦・平和を求める作品を書いてきたヒキメットは、この詩のほか、拡大し続ける原水爆実験への抗議を内に秘めた詩をいくつか作っている。外国人(トルコ人)でも人間の生命を尊重する考え方を基底にして「反原爆」の意思を伝える表現が可能であることを、私はヒキメットから学んだ。そのことが、「原爆文学」について研究しようと思った最大の理由でもある。

本研究の対象作家は、小説家の原民喜、大田洋子、林京子と詩人の峠三吉、栗原貞子及び歌人の正田篠枝である。彼らを選んだ理由は、この作家たちが被爆者作家であり、原爆投下直後から被爆体験を表現し始め(林京子を除く)、戦後すぐに

自らの「被爆体験」を小説や詩などの「表現」によって人々に伝えようとした文学者たちだからである。外国人として今や世界共通の問題となっている「原爆・核」について、その本質とは何かを考えながら、「体験を表現へ」と努力した原民喜以下の作家が、「原爆」をどう受け止め、表現したのかを本研究において考えようとした。

2. 論文の構成

本論は、「はじめに」から「おわりに」まで 1600 字詰めA4 判で約枚70枚、本文の部分を5章で構成している。「はじめに」で研究動機と目的、研究意義の概略を示し、「おわりに」では、第一章から第五章まで考察したそれぞれの作家の原爆表現の特徴について反省を含めてまとめた。本文の1～5章までの概略は以下のとおりである。

3. 研究の経過とまとめ

小説家・詩人の原民喜の場合、被爆体験を表現することで最も重要なのは「書き残さなければならぬ」という意識であった。彼は、作家は「書き残す」責任があるという意識を常に持って、体験したことを『夏の花』(1947年)などの作品で冷静に表現し続けた。

大田洋子も、原民喜と似たような点から被爆体験を書き始める。それは「書くことを急ぐ」ということであるが、これは被爆による原爆症にかかって死ぬという恐怖があったためで、目撃したことをいち早く記録(表現)しようとした。大田洋子は、被爆後、原爆だけをテーマとした作品を書くようになる。被爆体験を基に最初に書いた『屍の街』(1948年)は、疎開先で一枚の紙、一本の鉛筆をさえ買えない状況の中で、作家としての矜持を頼りに書いた作品であった。

*“A Research on the Atomic Bomb Literature-Focusing on the Hibakusha Writers' Expressions of the Atomic Bomb Experiences-” by Filiz YILMAZ

峠三吉は、その短い生涯において被爆体験を詩の形で表現しただけでなく、積極的に原水爆禁止・反戦平和運動に参加した詩人である。そして、彼は作品の中で被爆体験を表現すると同時に人々を反戦・反核運動へと呼びかけた。というのも、彼にとって人々に原爆(被爆)の真実を知らせることだけでは十分でなく、被爆者以外の人々も原爆の真実を理解して欲しい、そして反原爆の意識を持ってもらいたいと熱心に思ったからであった。それ故に、彼は世界に向かって「永遠の平和」のために戦おう、と呼びかけたのである。

詩人栗原貞子も、「世界の終わりを思わせる情景」を体験(目撃)して、被爆体験を基にした表現を中心にいち早く文化活動を始めた人間である。その中でも印象深い作品は、日本の「戦争」責任という考えを含んだ作品「ヒロシマというとき」(1972年)である。彼女は、被爆者(日本人)が実はアジアや中国大陸・朝鮮半島などにおいて加害者であり、広島原爆はその帰結であることを指摘したが、これは他の被爆者作家と違って大変ラジカルなものであった。

また、原爆症による乳癌で亡くなった正田篠枝は、広島の被爆体験を短歌の形で表現し、冷戦時代の核軍拡競争下の全世界が危険な状況にあることなどを訴えた。占領軍のプレス・コードをかいくぐって刊行した歌集『さんげ』(1947年)は、特筆すべき彼女の表現であった。

林京子の場合、他の被爆者作家と違って被爆する前は15歳の少女であり、当然作家活動をしていなかったが、被爆から30年後に被爆体験を基にした『祭りの場』(1975年)でデビューしたという特徴を持っている。それに、林京子は生まれたときから約14年間海外(中国・上海)で生活するという経験を持ち、日中戦争を少女期に経験していたこと、そして1985年から3年間「敵国」アメリカで生活したことから、他の被爆者作家と異なる視点を持って表現してきた。

以上のように、「原爆(被爆)」体験は、それぞれの作家によって様々な形であったが、それはまた、それら作家の被爆体験の受け止め方、表現する方法も異なっているということを意味し、その結果「原爆文学」は多様性を持った「体験の表現」になった。しかし、表現の仕方は異なっても彼らの表現に

は共通点がある。それは、全員が最終的には「核のない世界」の実現、「世界平和」を訴えているということである。つまり、彼らは表現を通して、彼らの共通の希望であった「核の無い世界」の実現を目指していた、ということである。

4. 課題

6人以外の被爆体験を持つ文学者について十分な研究が出来なかったので、今後研究を進めて行く必要がある、と考えている。また、原爆文学は被爆者作家の表現だけでなく、非被爆者作家の表現をも含む幅広い文学である。修士論文において時間的な制約や資料収集不足のため非被爆者作家の表現に触れることができなかったが、博士課程への進学後、「原爆文学」をより総合的に論じるために6人以外の被爆者作家の表現に加えて非被爆者作家の表現にも言及したいと考えている。さらに、戦後文学史における原爆文学の位置についてはほとんど触れることができなかったが、この点も今後の課題の一つである。

文献(主なもの)

- [1] 大原三八雄編『世界の原爆詩集』角川書店、1974.
- [2] 「核戦争の危機を訴える文学者の声明」編『日本の原爆文学』(全15巻) ほるぷ出版、1983.
- [3] 黒古一夫『原爆とことば 原民喜から林京子まで』三一書房、1983.
- [4] 黒古一夫『原爆文学論—核時代と想像力』彩流社、1993.
- [5] 増岡敏和『原爆詩人峠三吉』新日本出版、1985.
- [6] 栗原貞子『問われるヒロシマ』三一書房、1992.
- [7] 正田篠枝『さんげ』社会思想社、1995.
- [8] 井上ひさし・河野多恵子・黒古一夫編『林京子全集第1巻 祭りの場・ギヤマン ビードロ』日本図書センター、2005.
- [9] 黒古一夫『戦争は文学にどう描かれていたか』八朔社、2005.
- [10] 西尾幹二『GHQ焚書図書開封』徳間書店、2008.